

私の最期の日

saolipooh

私の最期の日

今日は、私の最期の日だ。

朝、目覚めて、それを悟った。今日のいつ、死が訪れるのか。未熟な私では、そこまでのことはわからなかったけれども、今日が運命のその日であることに、私は気づいた。

朝、起きて、仕度をし、同棲している彼が出勤するのを見送ると、さて、これから、一日が始まる。そういえば、結局、彼と結婚することはできなかったのだなあ、としみじみ思った。

今日こそは、片付けようと思いながら、伸ばし伸ばしになっていたことをやっつけてしまおうと、私は、息を巻いた。本棚の整理や、中途半端な仕事や、日記と家計簿のつけ忘れも点検しなければならないし、買いものをして、ピクルスもつくろう。たくさんの用事が思い浮かび、それらに少しずつ手をつけていく。しかし、あれもこれもと、用事について考えているうちに、朝の意気込みは、いつの間にやらしぼんでしまった。今日、私は死ぬのだなあなどと考え出すと、なんとなく、集中力が途切れ、ぼんやりとしてしまう。午前中は、瞬く間に過ぎ、2時、3時と時は流れ、太陽は、どんどん動いていった。慌てて、洗濯機を回して、なんとか太陽が出ているうちに洗濯物を干したが、必要な雑用に手間取られているうちに……それは、テレビを見ながらだらだらと非効率的にやっていたせいもあり……日が暮れてきた。

気がつくやうに、日が徐々に傾きだし、あっという間に、窓の外空が赤く染まっていくのが見えた。私は、ベランダに出て、ゆっくりと街の景色の奥に沈んでいく太陽の丸々と赤い姿を眺めた。浮かんでいる雲々が、太陽の後ろ髪を赤いのを引っ張り合い、その腕を赤くしている。たくさんの雲に引っ張られ、太陽は沈むのをためらいがちに、それでも確実に、静かに沈んでいく。黒い闇の帳がすぐ傍に迫る。太陽も、これから死に臨むのだ。死ぬ前のこの瞬間を、さすがの彼も永遠のように感じているのだろう。人も、死は、訪れてしまえば最後、永遠のものであるかのように思ってしまうが、実は、死は、この世で何度も繰り返されている、瞬間に過ぎない。数時間もすれば、規定どおりに朝になる。太陽は沈んでも、また朝は来るのだ。それでも、死を前にすれば、恐怖を感じるのだろうか。そんなことを考えながら、死にゆく太陽を眺めながら、その裾野に包まれていると、急に不安を感じてきた。

太陽が完全に沈み、辺りが真っ暗になると、私の胸には心細さがつのってきたのだ。

ついさっきまで、思いつかなかったことなのだが、急に、最期のときを一人で迎えるのは嫌だ、という気持ちになった。完全なる闇に包まれて、一人きりで、どこか別の世界に旅立たなければならないとしたら、それは、これまでにないほどの淋しさになるのではないか。せめて、彼氏に帰ってきてもらいたい。そして、みとってもらいたいものだ。そんな考えがひらめいたときから、なんだか、恋愛が私の人生にとって、非常に重要なものであったことのように思えてきた。そのことに、今まで気づいていなかっただけなのだ。私は、最期のこの日、何はともあれ、彼と一緒に過ごすべきだったのに、うかうかして、いつもの毎日と同じように、ぼんやりと彼の帰りを待っているだけなのである。それは、どうしようもない失敗のような気がしてきた。

また、私は、今日、やり残したあれやこれやが、心配になってきた。日が沈むまで、たくさん時間があつたはずなのに、何をしていたのか、午前中のことは、全く思い出せなかった。きっと、ものすごく時間を無駄遣いしていたのだ、と思うと、悔しく、自分が情けなかった。けれど、

もう、今日も残り短くなっている。やりたかったことを全てやるだけの時間は、私には残されていないのだ。私は、自分の心残りであることを、一つ一つ思い出して行って、そうして、なんやかんやと理由をつけて諦めることを始めた。シャンプーが切れそうだったのに、買うのを忘れていたけど、これから出かけていく労力を考えれば、今日はもう諦めよう。家計簿の残りは、レシートをとっておいているから、そのままにしても彼は許してくれるだろう。遺品の整理をしておくべきだったなあ、でも、きっと死後、彼か家族がやってくれるのだから、まあいいか。

……。そのようなことをいちいち考えたり、言い訳をしたりしながら、私は、そわそわしていた。こんなことをしているうちに、死んでしまうのかもしれないのだ。もっと他にすべきことがあるのではないか？このままでいいのだろうか？……。しかし、焦りは何も生み出さず、無為に時間は過ぎ、仕事はほとんどはかどらなかった。

夜も更け、洗濯物を取り込み、夕食の支度をしていると、やっと彼が会社から帰ってきた。彼の顔を見て、彼の仕事の愚痴や、今日起きた面白かったこと、どうでもいいような情報などを聞いていると、一人であれこれ悩んでいた気持ちは薄らいでいくのが分かった。夕食の準備ができると、二人でいつもの晚餐が始まった。テレビを見ながら、あれやこれや話しをする。味噌汁や、サラダや、自分の作ったハンバーグやほかほかの白ご飯などを順に口に頬張りながら、柔らかくほぐれていく顔の筋肉を感じ、にこやかな晚餐がすすむと、私は、いつの間にか自分の運命を忘れていた。どうかすると、このまま忘れていさえすれば、死神さえ、私に鎌を下ろすタイミングを逸するのではないか。そんな思いが、チラリと頭をかすめた。すると、心臓が、バクバクと音を立てて波打った。ムラ気の多い心が忘れてしまっても、体は、自分の運命を忘れずに、時折、私に警告するのである。

それでも、風呂に入って、ゆったりとした時間の合間、私は、もう開き直ることができた。やり直したいことや、悔やむことはたくさんあるけれど、全て日が沈んだ今となっては、取り返せることではない。どうしてもやりたいこと、必要なことは、また朝になって、やり直せばいい。ただ、それだけのことだった。私が死んでも、数時間後には、また朝日は昇るのだ。

楽しみにしていたドラマを見終わると、もういつも寝る時間になっていた。私は、彼と一緒にベッドに入った。仰向けになる彼の腕に腕を絡ませながら、わざと甘えた声で「ねえ、お休みのチューは？」と言うと、彼は少し起き上がってこちらを向き、軽く、私の口に唇を合わせた。そうすると、私は安心して、そのまま眠りについた。

それが、私の最期の眠りになった。